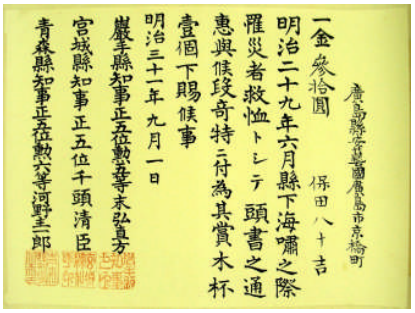
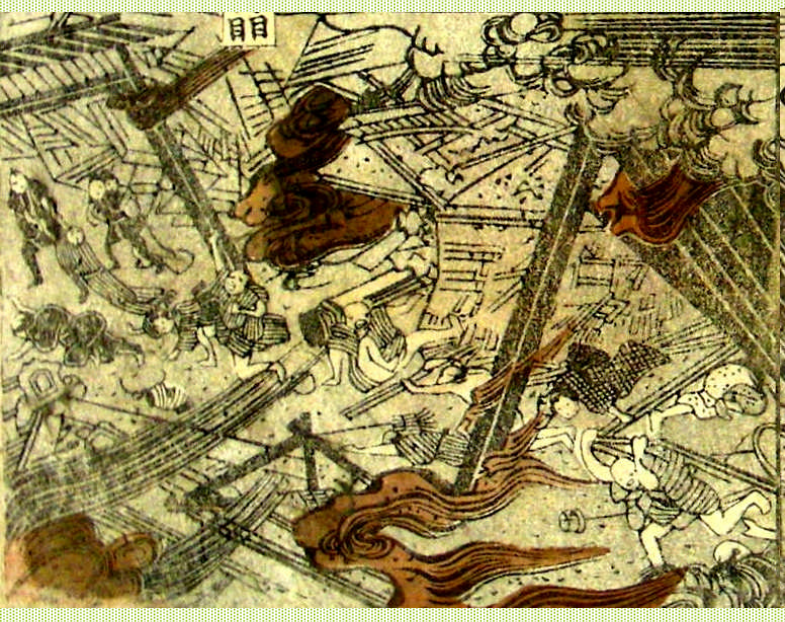
広島県立文書館 収蔵文書の紹介

災害の記録と記憶

平成23年10/11(火)～12/27(火)





はじめに

三月十一日に発生した東日本大震災では多くの尊い命が失われ、今でも避難所での生活を余儀なくされている多くの方々がおられます。この場を借りて深く哀悼の意をささげますとともに、今なお苦しんでおられる被災者の皆様に心よりお見舞い申し上げます。

さて、広島地方でも江戸時代から現代に至るまで、地震や水害などの多くの自然災害が発生し、大きな被害が出ています。

地震では、嘉永七年（一八五四）から安政五年（一八五八）にかけて大小の地震が頻発しています。当時の日記などからは、屋外で夜を明かした人々の不安な様子が伝わります。平成十三年（二〇〇一）芸予地震は記憶に新しいところです。

広島県は南に瀬戸内海、北に中国山地をひかえ、全国で最も多くの土砂災害危険箇所を抱えていることから、昔から豪雨に見舞われると河川は氾濫（はんらん）し、山岳は崩壊し、大水害となります。戦後だけでも昭和二十年（一九四五）の枕崎台風を初めとして、枚挙に暇がありません。

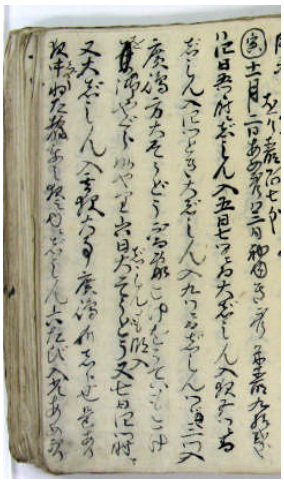
自然災害は避けられませんが、日頃から過去の災害の記録を収集・整理し、災害の記憶を消さないように心がけ、見直すことにより軽減することは可能です。今回の展示は、地震・水害に関する過去の情報を提供し、県民の皆様の防災意識を高め、それぞれの地域での災害への備えがより積極的なものとなることを願って企画しました。（担当　西村　晃）

一　地震の記録と記憶

「御旧記」（中垣家文書九七〇六―一）

文化十四年（一八一七）から明治十四年（一八八一）まで、沼田郡伴村の農民が記した約六十年間にわたる記録である。

嘉永七年（一八五四）十一月四日に軽い地震があり、その翌日の七つ（午後四時頃）に、紀伊半島から四国沖を震源とするM八・四の巨大地震（安政南海地震）が起こった。広島でも、広島城の櫓が崩れるなどの大きな被害が発生した。夜中も余震が続いたため、人々は一睡もできなかったという。

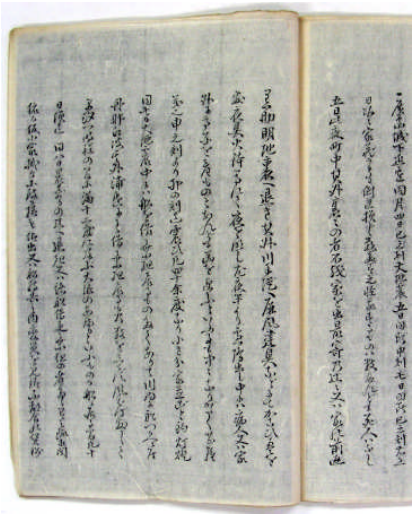


○寅十一月二日、あめふり、同三日、初ゆきふり、米直段九拾弐匁、
同四日五つ時ニじしん入、五日七つニて大じしん入、夜五つニて
じしん入、四つとき大じしん入、九つニてじしんつゞく、三つ入、
広島方大そうどう、ふる家こけ、をうていもこけ、
じしんも段入
を■御やぐらかやり、六日、大そうどう、又七日四つ時ニ
又大じしん入、其夜大事広島・しらせ是あり、
夜中　ねた者なし、夜之内ニじしん六たび入、少しあめふり

「反古集綴書」（広島市立中央図書館浅野文庫家文書八八一三―二五）

広島における安政南海地震の被害状況は、寛山という人物がまとめた記録にも掲載されている。

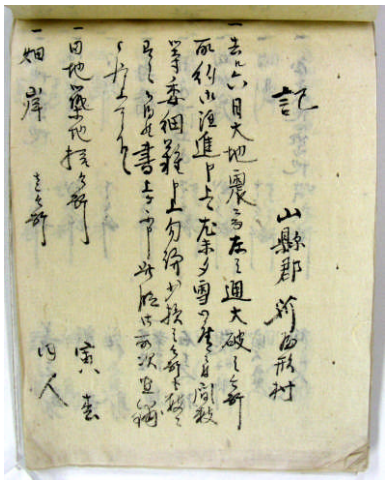
この地震で広島では死者は出なかった。しかし、五日は夜間も余震が続き、人々は雪が降り出す中を、戸外に畳を敷き、屏風を立て、火鉢を囲んで夜を明かした。病人や産気づく女性があっても医者を呼ぶこともできなかった。七日にも大きな余震があり、船を借りて川へと避難する女子や子供が多く、当分は船での生活を余儀なくされた。業者の中には不都合な値上げを行う者も現れたという。



一広島城下近辺同月四日巳之刻大地震、五日同断申刻、七日同断巳之刻、右之
日所々家蔵ラとも倒れ損じ数多有之、怪我するものハ数あれども死人ハなし、
五日此夜中其外裏々の者不残家を出、最寄の辻々又ハ家の前通
り筋明地裏へ退き、其外川手堤へ屏風・建具などにてかこひ、畳を
敷、夜具・火鉢等にて夜を明し、尤夜半より雪降出し、中にハ病人又ハ家
外にて子を産ものもあれども、医を迎ふといふ事も中々なりがたく、甚難
義也、申之刻より卯の刻迄震ひ、凡四十余度なり、小き分家並ごと釣灯燈、
同七日大地震、中にハ船を借、乗組居るもの多くありて、川内に船つかへニ付
丹那・江波其外浦辺にて借乗組居るもの数をしらず、風はげ敷して
早汐、一時程の間に満干二度に及ぶ、大浪のあまりといふものか、船ニ居る間
凡十日頃迄、同八日最寄の辻へ退き又ハ諸船借受乗組の者多く有之趣相聞

「地震ニ付損所御注進書附」（深井家文書九二〇八―四四八）

明治五年（一八七二）二月六日の夕方、島根県浜田沖でM七・一の地震が発生し、死傷者千人以上の被害となった。広島県域では幸い死傷者はなかったが、山県郡では苅屋形・南門原・大利原・土橋村で家土蔵の半壊一五軒、奥中原村では延長五〇〇メートルにわたる亀裂が生じるなどの被害が報告されている。



記　　山県郡苅屋形村

一去ル六日大地震ニて左之通大破之ヶ所
取約御注進申上候、尤未タ雪御座候ニ付間数
等委細難申上、勿論少損之ヶ所も数々
有之候得共書上ケ不申、此段御取次宜鋪
被仰上可被下候
一田地築地拾ヶ所　　寅　松
一畑岸　壱ヶ所　　同人

「地震並出火細見記」（奥田氏収集文書九八〇六―一〇〇七）

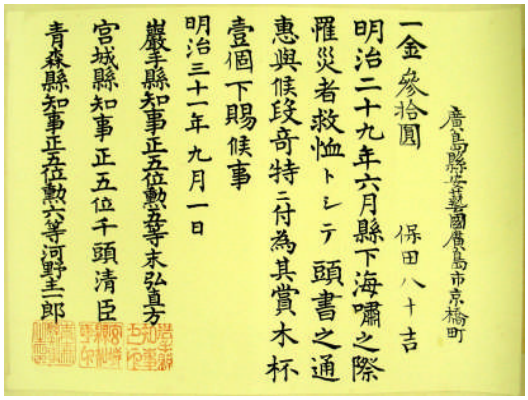
安政二年（一八五五）十月二日、江戸では前年の安政東海・南海地震に引き続き、直下型の江戸地震が発生した。関東南部に被害が集中したが、特に江戸では火事が発生し、下町を中心に死者約四三〇〇人、倒壊家屋約一万戸などの甚大な被害が生じた。

人々は予測不可能な不安感から情報収集に熱を上げ、速報性と正確性が競われた木版刷りの瓦版が多数印刷された。これは江戸や関東南部の焼失場所や地震被害状況などを記した多色刷りの細見記で、市中を焼き尽くす炎の勢いや、取るものも取りあえず逃げ惑う人々が生々しく描かれている。

明治三陸沖地震（津波）義援金への感謝状（保田家文書九六〇三―七ほか）

明治二十九（一八九六）年六月十五日、岩手県釜石沖でM八・二から八・五の巨大地震が起こった。地震に伴い、同県綾里湾の海抜三八・二メートルを最高とする海嘯（津波）が発生し、岩手県（一万八一五八人）を中心に死者・行方不明者二万一九五八人という大惨事となった。

当時、広島財界きっての実力者で、資産家であった広島市京橋町の保田八十吉は、東北三県への義援金として三〇円（現在の約三六万円程度）を寄付した。左上写真は岩手・宮城・青森県知事連名の感謝状である。このほかにも、多くの人々がわずかずつ行った寄付に対する三県知事感謝状が伝わっている。



一金參拾圓　保田八十吉

明治二十九年六月縣下海嘯之際罹災者救恤トシテ頭書之通恵與候段奇特ニ付為其賞木杯壹個下賜候事

明治三十一年九月一日

巖手縣知事正五位勲五等末弘直方

宮城縣知事正五位千頭清臣

青森縣知事正五位勲六等河野主一郎

関東大震災の写真画帳と絵葉書（広銀「創業百年史」編纂資料九一〇九―三〇七五、延藤家文書九一一〇―六二四ほか）

大正十二年（一九二三）九月一日、関東地方南部を襲った大地震により、死者・行方不明者一〇万五千人余、家屋の全壊一〇万九千戸、焼失二一万二千戸という未曾有の大災害がもたらされた。

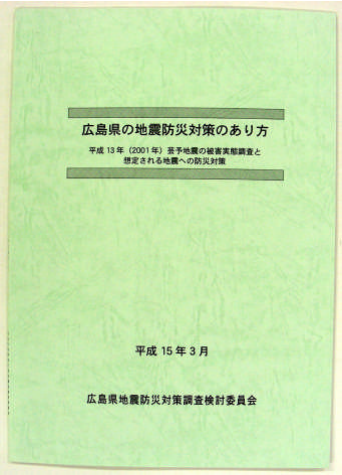
左中写真は震災直後に大阪朝日新聞社が発行した『大震災写真画報』第一集から第三集で、百万部以上売られたという。第一集の表紙となった上野の西郷像には、行方不明者の情報を求めるビラが多数貼られている。左下写真は、これも震災直後に多数発行された震災関連の絵葉書（右上は横浜正金銀行、右下は銀座三越付近、左は浅草十二階の被災当時の実況）。

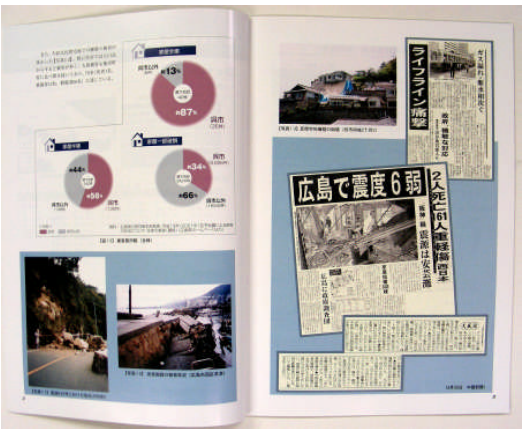
平成十三年芸予地震に関する行政資料（行政資料二〇〇三―六四三・二五八）

平成十三年三月二十四日（土）の十五時二十八分ごろ、安芸灘（あきなだ）東部を震源とする「平成十三年芸予地震」（M六・七）が発生した。広島県内の最大震度は六弱を記録し、死者一人、負傷者一九三人、住居の被害は三万七〇〇〇戸以上という、広島では近年には見られない大きな地震災害となった。

特に、古くから傾斜地での宅地開発が進められてきた呉市内では、民間住宅の石垣が崩れるなどの被害が多く見られた。現在では国の重要文化財に指定された澤原家（呉市長ノ木）の三ツ蔵でも外壁に亀裂が生じ（写真左上）、蔵内に収められていた資料が落下、散乱するなどの被害があった（写真右下は県河川砂防総室『芸予地震に係る民間宅地擁壁復旧事業の記録』）。

広島県では、芸予地震に関して総括調査を行い、平成十二年の鳥取県西部地震、東南海・南海地震についても情報を整理、分析することにより、今後の地震防災対策のあり方を総合的に検討し、平成十五年三月に報告書（写真左下）をまとめた。





広島の大地震年表（近世以降）

年代	西暦	月日･マグニチュード･被害状況等
寛永元年	1624	12 月 13 日，震源は安芸国。広島城の石垣や多門･櫓･塀などが崩壊する。
慶安 2 年	1649	2 月 5 日，震源は伊予灘，M7.0。広島藩領内で大地震。侍屋敷や町屋に被害あり。
貞享 2 年	1685	12 月 10 日，震源は伊予灘，M7.0～7.4。広島藩領中西部 199 か村で死者 2 人，家損 147 軒など。宮島では大宮御殿棟瓦･経堂屋根などに被害あり。
宝永 4 年	1707	10 月 4 日（宝永地震），震源は四国から紀伊半島沖の南海トラフ，M8.6。数度にわたり大地震。広島城，その他領内で全壊 78 軒，半壊家屋 68 軒。三原城の石垣が崩れる。
享保 18 年	1733	8 月 11 日，震源は安芸灘，M6.6。奥郡で被害あり。
安永 7 年	1778	1 月 18 日，震源は石見国，M6.5。安芸国から備前国にかけて大きく振動する。
嘉永 7 年	1854	11 月 4～5 日（安政南海地震），震源は四国から紀伊半島沖の南海トラフ，M8.4。広島城の栗林櫓など崩壊。各地でも大被害。8 日まで大小余震 55 回。翌年 3 月 16 日に余震やむ。
安政 4 年	1857	8 月 25 日，震源は伊予灘，M7.2～7.3。大地震。振動は短いが，広島城下家屋の破壊，人畜の死傷は少なからず。9 月 4 日まで余震。9 月 10 日に大震あり。
安政 5 年	1858	12 月 2 日，震源は石見国西部，M6.2±0.2。夕から終夜振動。12 日間毎日数回の微震あり。
安政 6 年	1859	9 月 9 日，震源は石見国山中，M6.0～6.5。大地震。広島城内休息所入口の鴨居落下。その後も余震やまず。11 日に再度大震。広島城下の多門など破損。
明治 5 年	1872	2 月 6 日（浜田地震），震源は浜田沖，M7.1±0.2。安芸国各地で負傷者 3 人，家屋倒壊 63 軒など。
明治 38 年	1905	6 月 2 日（芸予地震），震源は安芸灘，M7.2。死者 11 人，負傷者 154 人，家屋全潰･半潰など 6,222 戸。
昭和 21 年	1946	12 月 21 日（南海地震），震源は四国から紀伊半島沖の南海トラフ，M8.0。負傷者 3 人，家屋全壊･半壊 123 戸。
昭和 24 年	1949	7 月 12 日（安芸灘地震），震源は安芸灘，M6.2。呉で死者 2 人。
平成 13 年	2001	3 月 24 日（平成芸予地震），震源は安芸灘，M6.7。死者 1 人，負傷者 193 人，家屋全壊 65 棟。

宇佐美龍夫『日本被害地震総覧』（東京大学出版会，2003），『広島県史』年表，広島県防災 web などによる。

二　水害の記録と記憶

「おいのくりこと　第三号」（小川家文書一〇〇六〇三）

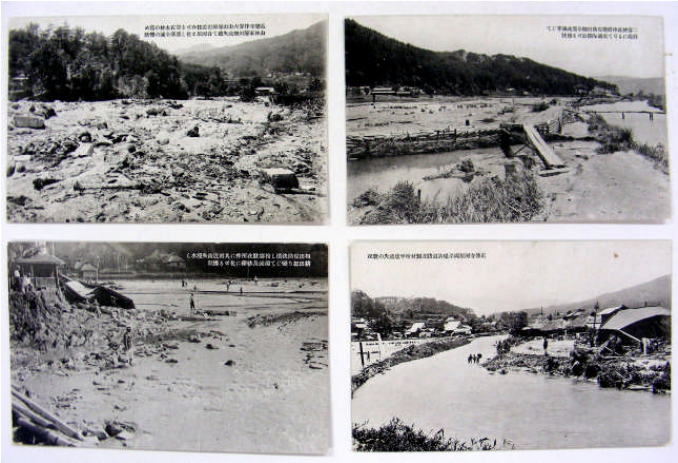
「老いのくり言」は、広島藩医士を勤めた佐伯郡草津村（現広島市西区）の医師小川清介（一八三八～一九〇一）による回想録である。

明治三十三年（一九〇〇）八月十九日、広島地方に台風が襲来して暴雨風となり、県西部の沿岸部では大水害が起きた。廿日市の住吉堤防が切れ、新開地は水浸しとなった。草津では家屋が破壊され、大小の船舶が市中まで打ち上げられた。井口村新道は土砂が流出して鉄道のレールは橋のようになり、汽車は運行を中止した。電柱が転倒するような暴風は電線の架設以来初めてであったという。庚午新開の堤防へは数十枚の畳を積み上げるなど手を尽くして洪水を免れた。

安佐郡安村大水害絵葉書（原田家文書九二〇六―三四～三八）

太田川の支流、安川は江戸時代以来たびたび水害を起こし、周辺各村の人家や田畑に大損害を与えていた。昭和三年（一九二八）六月二十四日の大水害もその一つで、洪水の被害状況を写した絵葉書を安村役場が発行している。

安佐郡安村は前夜からの大雨で安川両岸の二か所の堤防が決壊した。濁流は二つに分かれ、一つは更に上安公会堂の堤防を決壊させ、もう一つは安村役場や駐在所を一呑みにした。



ルース台風の被害と募金活動の資料（行政文書S〇一―二〇一一―四五三、広島県青年連合会文書九五〇七―三一六）

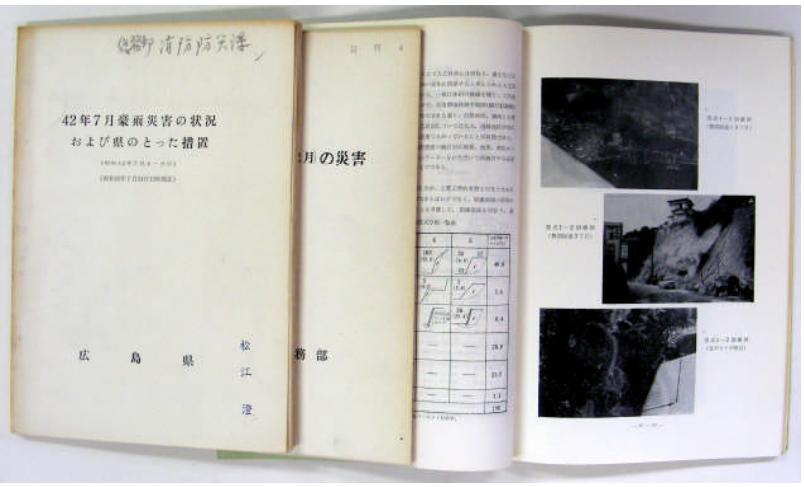
ルース台風は昭和二十六年（一九五一）十月十四日の午後十一時過ぎに山口県防府に再上陸した。強風の影響で高潮となり、また、上陸時には前線を伴ったため大雨となり、県内各地で堤防が決壊して大きな被害が出た。県内の死者は一六六人に上った。広島市内の本川に架かる写真左上の住吉橋は、昭和二十年の枕崎・阿久根台風で落橋し、当時は本橋並びに木造仮橋が架橋されていたが、この台風でまた流出した。

この年、広島県青年連合会が中心となり、罹災者のために県民から見舞金を募集している。写真左下はその趣意書や募集一覧表である。

昭和四十二年七月豪雨による呉市の災害の調査速報など（行政資料X〇二―七〇など）

昭和四十二年七月は梅雨前線が停滞し、五日から降り出した雨は、台風七号の影響を受けて前線が活発化し豪雨となった。呉市では一時間の雨量が七四・七ミリという呉測候所開設以来の豪雨であった。

ぜい弱な地形・地質の呉市では、山崩れ、崖崩れ、土石流、河川の決壊、氾濫が発生し、生き埋め一七一人、死者八八人の大災害となった。



昭和四十七年豪雨被災状況写真・災害誌など（行政文書S〇一―二〇〇七―一二六、行政資料九〇―四九四など）

梅雨前線の影響で昭和四十七年七月九日から雨が降り始め、雷を伴う断続的な豪雨となった。十五日午前九時までの総雨量は、三次の六二二ミリを最高に、県北では五〇〇ミリ以上、沿岸部でも二〇〇ミリを超え、記録的な大雨となった。

このため県下の各河川の水位は上がり、県北部で氾濫や崖崩れが相次いだ。この豪雨による死者・行方不明者は三九人に上ったほか、住家の被害一万九二〇八棟を始め、農林地や公共施設にも大きな被害が出た。写真左上は、三次駅前通りの被災状況で、最大水位が一階天井まで達したことが示されている。

昭和六十三年県北西部豪雨災害の状況写真集・速報版など（行政資料九〇―一八一七、九二―二〇一など）

昭和六十三年七月二十日夜になって梅雨前線の活動が活発となった。急激に発達した雨雲が島根県三隅町付近から県北西部に移動し、山県郡加計町を中心に雨が強まり、六時間で二四六ミリという局地的な豪雨となった。

この豪雨で加計町・戸河内町を中心に土石流災害が発生し、死傷者二五人に及ぶ被害となった。加計町江河内地区で発生した土石流は一瞬に民家を呑み込み、九人が犠牲となった。写真左下は江河内地区の航空写真。次頁写真右上は同地区の全景と江河内谷川の中流から下流を写した被害写真。

平成十一年六月豪雨災害速報六・二九など（行政資料二〇〇五―一二四など）

北上と南下を繰り返す梅雨前線により、広島地方は平成十一年六月二十三日から断続的な雨となり、二十九日は所々で雷を伴った激しい雨が数時間にわたって降り続き豪雨となった。この雨が引き金となって山崩れ、崖崩れ、河川の氾濫、土石流等が多数発生した。この災害では、県内の南西部を中心に死者及び行方不明者が三二人となったほか、住家の被害は四五一六棟に及ぶなど、甚大な被害が発生した。この頁の左上の写真は広島市佐伯区五日市町下河内（しもこうち）で発生した土石流災害。

三　大災害に備えて

「広島県地域防災計画」と「自主防災結成の手引き」（行政資料二〇〇五―一五九一・七六一）

広島県ではこれまで、地震や豪雨などの自然災害により尊い住民の生命や財産が犠牲になってきた。

このため広島県では、災害対策基本法に基づき、広島県防災会議により「広島県地域防災計画」を策定している。この計画では、防災に関し県、市町をはじめ、行政機関や自衛隊、公共機関などの防災関係機関が処理すべき事務や業務を定めているほか、県民の役割を明らかにし、災害予防、災害応急対策、災害復旧についても必要な対策の基本を定めている。この広島県地域防災計画は、災害対策全般に及ぶ「基本編」と地震災害対策に関する「震災対策編」、災害対策に必要となる基礎資料を収集した「附属資料」により構成されている。

また、大規模な災害が発生した場合、その被害を最小限に止めるためには、各地域での防災活動が不可欠である。県では、自主防災組織を結成するための手引きを刊行している。

広島の大水害年表（明治以降）

年代	西暦	月日･被害状況等
明治 7 年	1874	8 月 21 日, 暴風雨･洪水･高潮により死者 101 人（うち溺死 86 人）, 負傷 123 人など。
明治 11 年	1878	7 月, 奴可･三次･恵蘇 3 郡を中心に暴風･洪水。死者 7 人, 人家流出･破壊 103 戸など。
明治 13 年	1880	7 月 1 日, 降雨で可愛川･芦田川･太田川などが増水し, 総額 73 万円以上の大損害。死者 4 人, 人家流出 34 軒, 破壊 236 軒, 浸水 3,726 軒など。
明治 17 年	1884	8 月 25 日, 大風雨とともに大津波来襲。沿岸部, 特に広島区･佐伯郡の被害甚大。死者 131 人, 家屋全壊 1,201 戸, 半壊 1,154 戸など。
明治 26 年	1893	10 月 11 日, 台風により死者 128 人, 家屋全半壊 20,281 戸, 堤防決壊 8,783 か所など。
明治 28 年	1895	7 月 24 日, 高潮で死者･行方不明 17 人, 家屋全壊･流出 226 戸, 船舶沈没･流出 320 隻など。
明治 33 年	1900	8 月 19 日, 台風で広島の国泰寺新開の堤防決壊, 広島市南部が高潮で浸水。死者 4 人, 家屋全壊･流出 187 戸, 同半壊･破損 1,470 戸。
明治 35 年	1902	8 月 11 日, 暴風雨で倉橋島の 34 人など死者･行方不明 94 人, 家屋全壊･流出 323 戸など。
明治 40 年	1907	7 月 15 日, 安芸郡奥海田･矢野･坂など各郡で水害。死者 200 人以上。
大正 4 年	1915	9 月 9 日, 台風による高潮で尾道･三原･糸崎で浸水家屋 1,000 戸, 死者は 2 人。
大正 8 年	1919	7 月1～4 日, 豪雨で芦田川の堤防が決壊し福山市で大水害。溺死者 17 人, 家屋全壊･流出･半壊 223 戸, 床上浸水 3,423 戸など。9 月 14 日にも芦田川氾濫し, 備後地方大水害。
大正 9 年	1920	8 月 15 日, 台風で備後南部を中心に死者 26 人, 家屋全壊･半壊 129 戸など。
大正 13 年	1924	9 月 11 日, 豪雨で山陽線己斐･五日市間で線路埋没し列車転覆。死者 10 人。23 日に山陽線安芸中野･海田市間で豪雨による築堤崩壊のため脱線転覆。死者 36 人。
大正 15 年	1926	9 月 10 日, 広島市を中心に局地的豪雨。死者･行方不明 101 人, 家屋流出 242 戸。翌日安芸郡畑賀村で山崩れのため死者 36 人。23 日に山陽線安芸中野･海田市間で豪雨による築堤崩壊のため脱線転覆。死者 36 人。7 月 6 日にも梅雨前線による大雨で, 死者 10 人。
昭和 3 年	1928	6 月 24 日, 西部を中心に豪雨。死者 8 人, 家屋全壊･流出･半壊 140 戸。浸水 4,401 戸など。
昭和 9 年	1934	9 月 21 日, 室戸台風。死者･行方不明 14 人, 家屋全壊･流出･半壊 704 戸など。
昭和 10 年	1935	6 月 27～30 日, 豪雨のため各地で出水。死者･行方不明 8 人, 家屋全壊･流出･半壊 112 戸など。
昭和 16 年	1941	6 月 25～29 日, 西部を中心に豪雨。死者･行方不明 12 人, 堤防決壊 71, 田畑冠水 5,731 町など。
昭和 17 年	1942	8 月 27 日, 台風による暴風雨と高潮。死者･行方不明 179 人, 家屋全壊･半壊 1,377 戸など。
昭和 18 年	1943	7 月 21～25 日, 台風で豪雨。死者 46 人, 家屋全壊･流出･半壊 347 戸など。9 月 20 日, 台風で豪雨, 死者･行方不明 47 人, 家屋全壊･半壊 1,225 戸など。
昭和 20 年	1945	9 月 17 日, 枕崎台風。死者･行方不明 2,012 人, 家屋全壊･流出･半壊 6,832 戸, 床上･床下浸水 52,526 戸など。10 月 10 日, 阿久根台風で死者･行方不明 12 人など。
昭和 26 年	1951	10 月 14 日, ルース台風。堤防の決壊などで死者･行方不明 166 人, 家屋全壊･流出･半壊 2,333 戸など。
昭和 27 年	1952	7 月 8 日, 大雨で死者 13 人など。7 月 29～30 日, 大雨で死者 11 人など。
昭和 35 年	1960	7 月 7 日, 梅雨前線停滞で大雨。死者･行方不明 18 人など。
昭和 40 年	1965	7 月 22 日, 県北で集中豪雨。災害救助法適用。死者･行方不明 23 人。被害総額 43 億円余。
昭和 42 年	1967	7 月 8 日, 大雨。呉市など沿岸部で死者 159 人, 負傷者 231 人, 全壊家屋 532 戸など。
昭和 47 年	1972	7 月 11 日, 豪雨により県下全域で河川氾濫や崖崩れが発生。県北を中心に死者･行方不明 39 人, 全壊･半壊家屋 2,520 戸など。
昭和 63 年	1988	7 月 20～21 日, 県北西部に局地的な大雨。土石流災害が発生し, 死者 14 人, 家屋全壊･半壊 58 戸など。
平成 3 年	1991	9 月 27 日, 台風 19 号で最大瞬間風速 58.9m／s。死者 6 人, 家屋全壊･半壊 492 戸など。
平成 11 年	1999	6 月 29 日, 最大時間雨量 81.0mm の豪雨。死者･行方不明者 32 人, 家屋全壊･半壊 169 戸など。

箱田顕雄・石丸順一郎編『広島県災異史』（広島県農業協同組合中央会, 1983）, 『広島県史』年表, 広島県防災 web などによる。

《広島県立文書館　収蔵文書の紹介》

災害の記録と記憶

展示期間　平成 23 年 10 月 11 日（火）
～12 月 27 日（火）

場所　広島県立文書館展示室
〒730－0052　広島市中区千田町三丁目 7－47　広島県情報プラザ２階

参考文献

宇佐美龍夫『日本被害地震総覧』（東京大学出版会, 2003）
箱田顕雄・石丸順一郎編『広島県災異史』（広島県農業協同組合中央会, 1983）
『広島県史』年表（1984）
広島県防災 web
（http://www.bousai.pref.hiroshima.jp/hdis/index.jsp）
横山雅昭『相田地区辺の郷土史メモ（広島市安佐南区）』（1994）